

神楽があるからここが好き

[島根県 / 石見神楽]



菅原道真公の面を持つ益田市の神田惟佑。
photo: Goto Eri

西

日本を豪雨が襲った8月最後の週末、島根県西部のJR益田駅前の雑居ビル3階の会議室では、机やいすを取っ払って週末恒例の夜神楽が開かれていた。入場料は高校生以上500円。午後8時の開演前には、親子連れを中心に約300人の観客で埋まった。

トントン、トーン……。太鼓が鳴り、面をつけた舞い手が舞台に現れる。この日は、人間に化けていたキツネが客席まで駆け下りてきて暴れ回る演目。怖がって泣く子もいれば、大喜ぶする子もいて、会場は大いにわいた。市内の会社員、原健治(42)とひとみ(41)夫婦は長男の蓮太郎(3)を連れてきた。1歳の頃から毎月のように家族で神楽を見ている。息子は「機嫌がいいと朝から晩まで踊っている」という「のぼせもん」だ。

島根県西部を代表する民俗芸能の一つが、この石見神楽だ。もともとは数年に一度の祭りで神職が儀式や舞いをしてきたのが、明治政府の神道国教化の政策の下、神職による演舞が禁止され、舞い手

が氏子に移って独自の発展を遂げた。いまも神社の奉納祭では必ず舞われるが、ここ石見地方では、本来の舞台である神社を飛び出して、市民向けの公演からスーパーのイベントまで、さまざまな場所で演じられる。特に海沿いの浜田市や益田市の神楽は、軽快なリズムや激しい動き、豪華げんな衣装が特徴だ。舞台芸能としても人気が高く、広島や大阪など近隣都市からも熱心なファンが見に来る。県や市もその集客力に着目し、地域活性化の起爆剤にしようとしている。

小学校の課外活動や「子ども神楽」も盛んだ。ある神楽グループの高校生は、神楽を始めた理由を「かっこよかったから」。進学で県外に出て、卒業したら地元に戻って神楽を続けたいという。

「誰もが幼い頃にあこがれるヒーローが、この地域では石見神楽なんです」。神楽の振興を担当する石見観光振興協議会の奥田弘樹(40)は言う。「近所のおじさんやおじさんが、ひとたび神楽の舞台上上がると別人のようにかっこよく舞う。そのギャップが実に魅力的」なのだという。

ほぼ毎週末どこかで行われる神楽は、地域の神楽集団「社中」が演じている。人口20万の地域に、

130以上の社中があり、一つの社中が年数回～50回の舞台をこなす。構成員は幼児から80代まで幅広いが、舞い手の中心となるのは20～30代だ。消防団員、運送会社員などさまざまな仕事をしながら、週に1、2回、平日の夜の練習をこなす。遠方の舞台は、マイクロバスに大道具一式を積み込み、自らハンドルを握る。舞台謝礼は、ほとんど実費に消えてしまう。

益田市の観光協会に勤める神田惟佑(32)は、170年の歴史を持つ「久城社中」の一員だ。祖父が神主だった縁で、子どもの頃から神楽を舞ってきた。今は神主と観光協会の仕事を掛け持ちしながら、週2回練習し、年40回ほど舞台上立つ。秋に結婚式を挙げる相手とも神楽が縁で知り合った。広島から舞台を見に来る熱心なファンだった。式の余興には当然、神楽が登場する予定だ。

全国の神楽を見渡せば、観光資源として行政がこ入れし、参加人数がじわじわと増えているものもあれば、山間部では、過疎化で存亡の危機にあるものも多い。なぜ、石見神楽はこれほど人々の生活に根づくことができたのか。全国の神楽に詳しい古代出雲歴史博物館の主任学芸員、藤原宏夫(39)は「石見神楽と一口に言っても地域によって舞

いも調子も違う」と断ったうえで、石見地域の特徴をこう解説する。「ほかの地域と比べて、新しいもの、面白いものを選んで採り入れてきた。共演・競演大会の企画、立体的なししゅうを施した豪華な衣装、ちょうちん式の八岐大蛇(やまのおろち)の大道具などだ。祭りの存続は核になる人の存在で決まるが、そういう人間を夢中にさせるものが祭りにあるかどうか大きいのではないか」(後藤絵里)

